

飯田龍太賞

(新作十五句)

水

神奈川県 池田 忠山

雨水はや研ぎあげられて土間の鍬
水温む雲を呑まんと鯉の口
山葵田のすみずみに水ゆきわたる
点滴のしづくの間合ひ目借どき
瀬しぶきに濡るるばかりに新樹光

受賞のことば

私にとって、四季おりおりに、近くのお濠や公園などを散歩することは、旅行や吟行などと同様に、何ものにも代えがたいひとときです。日常の煩わしさから離れ、身も心も自然に委ねられるからです。そして、五官を澄まして小さな発見や感動に恵まれるのを待ちます。それが、たまたま、言葉や表現になりそうなき、もう少し平易なものにならないかと、ここ数年は、腐心する日々です。

このたびは、思いもかけず、栄えある賞にお採り上げ下さった選者の先生方に心から感謝申し上げます。これを糧に、これからも精進を重ねます。

選にあたって

人が生きてゆくために欠かすことの出来ない水というものを題材としたこの作品は大変に興味があった。安易な内容になるのではないかと厳しい目で拝見したが、そんな気負った作品になっていないのを知って嬉しかった。

俳句は日常に親しく入って行ける表現を大切に

水張つて田ごと田ごとに月ひとつ
上水のけふは流れて太宰の忌
雀らのけふも浴び来て噴水台
星入りの水汲みに出て登山小屋
灯ともせばひと間みづいろ盆灯籠
磐梯山の沼ことごとく水の秋
みづうみといふ秋天の水鏡
ゆくゆくは背山に還る落し水
八の字の水尾の向き向き鴨日和
どこからか日々に水音日脚伸ぶ

したいという私の希望に副った一句一句であることは嬉しかった。今流行のように使われる新樹光は頂けない。光を入れなくても光を感じられるものでなくてはならない。
(稲畑 汀子)

水という身辺にあつてもつとも親しくもつとも大事なものに静かな目を注いだ句群の持つ力をよしとした。「水」は過去多くの俳人が目をとめ、句にした素材である。残された秀句も多い。その点、かなりむつかしい挑戦であつたと思う。過去幾人が句作の対象とした材であつても、自分の目でみた「水」を気負いなくとらえる、そこが大事だとおもう。
(宇多喜代子)

十五句は「雨水」で始まり、夏・秋・冬と続く。〈山葵田のすみずみに水ゆきわたる〉―いかにも溪流を利用した山葵田らしい。〈水張つて田ごと田ごとに月ひとつ〉―田植前に水を引いて整えたところ。〈灯ともせばひと間みづいろ盆灯籠〉―精霊を迎えるにふさわしい「みづいろ」。〈八の字の水尾の向き向き鴨日和〉―「鴨の陣」と言わず伸びやかにとらえた。それぞれ巧み。
(鷹羽 狩行)

稲畑 汀子選

選者賞 雪の宿

京都府 亀山みか月

かばかりの雪にをののき歩きをり
軒氷柱静かに人を幽閉し
雪吊のやう働いてゆるみなし
思ひきや深雪の里の観世音
新年会家を忘れて湯屋泊り
煮凝のゆるんできたりクラス会
冬灯置いて小さな露天風呂
髪乾く間も粉雪の積もりをり
思ひ出の恋は美し薄氷
雪の宿寝言聞かれてしまひけり
銀色の爪美しき冬帽子
城門に銃弾の穴虎落笛
集札箱置いて駄舎の冬ざるる
足跡を雪に残して旅終はる
冬三日月ほった赤く戻りけり

選評

雪国に住む人々は雪に慣れてい
るが、この作者はたまたま級会
の仲間達で雪の宿に泊り新年を
過ごしたのである。雪の中を歩
いて宿に着き、クラス会を兼ね
て新年を迎える。クラスの仲間
達の会話も想像されて面白い。
一句一句を通して広がる雰囲気
の中で行動も描けた。やや散漫
に感じられる作者の興味が終る
ことで終息する。

(稲畑 汀子)

宇多喜代子選

選者賞 玄海

福岡県 岸原 邦代

玄海や露草のるり濤の瑠璃
晩秋の波をどらせて船御幸
姫神を囲む船団鳥渡る
八朔や雀二羽来て三羽来て
襲ひ来し泥土流せよ天の川
祈りたき神のいろとも白芙蓉
浦まつり神饌の鯛より潮しづく
光り織る金の高機小鳥来る
梁に貼る護符の千枚施餓鬼寺
草ひばり墓碑となる石野ざらしに
鶏屋の鶏ひとかたまりに夕野分
水のいろ空のいろして糸とんぼ
雨あとの畑に種子蒔く賢治の忌
夕暮の田の面あかるき今年藁
大空の風をつかみて鷹渡る

選評

玄界灘を目の前にした暮らしの様がダイナミックにとらえられていて読み応えがあった。瑠璃色の海、浦の祭、身辺の小動物など。それらを背景に〈浦まつり神饌の鯛より潮しづく〉〈夕暮の田の面あかるき今年藁〉などの景がいきいきと書かれており、選者賞とした。

(宇多喜代子)

鷹羽 狩行選

選者賞 新藁

福岡県 深川 淑枝

田遊の神域をなす荒筵
使はれぬ蹴爪の長し春の霜
はればれと枯れて野焼の火を待てり
野火埃眉にもつけて勢子戻る
捨て毘の錆こぼれ落ついぬふぐり
春菌干し遠くまで湖青し
風呂敷はものの形に麦の秋
鋏使ふてのひら熱し初燕
馬の飲む水波立ちぬ夏隣
白南風やよく目の立ちしおろし金
海鳴りの獣ごゑして紫蘇畑
新涼や座り胼胝ある山羊の膝
白桔梗己れの開く音に揺れ
新藁をもらひし馬の咀嚼音
伏せ甕の胴ふつくらと冬桜

選評

〈風呂敷はものの形に麦の秋〉―「麦の秋」の季語が、風呂敷のしきりに使われた時代を彷彿とさせる。〈はればれと枯れて野焼の火を待てり〉―大景がひろがる。〈白桔梗己れの開く音に揺れ〉の感覚、〈新涼や座り胼胝ある山羊の膝〉の発見、こうした佳句がもつと欲しかった。タイトルになった句〈新藁をもらひし馬の咀嚼音〉は下五にもう一工夫あればと思った。

（鷹羽 狩行）